



## 「変化」をおそれない

校長 前田仁子

長雨に苦勞させられた四月も過ぎ、風は新緑が輝く季節となりました。昨年は、校長としての経験もなく先行き不安な思いでいっぱいでしたが、保護者の皆様や地域の関係各位、及び田野分校を含む多くの教職員の方々の力を借りて、何とか無事に学校経営を行うことができました。何よりも、生徒の皆さんの笑顔や、一生懸命努力する姿に励まされ、ともに歩いた一年であったように思います。

入学式や始業式には、パワーポイントの画像を使って色々と思うことを述べさせていただきましたが、生徒の皆さんは、どのように受け取られたでしょうか？私自身は、皆さんが全く私語もせず、私のほうを見つめて話を聞いてくれるので、思わず緊張したり、思ったことの半分も話せなかつたりして毎回反省をしています。「こんな話をしてほしい」とか、「こんな画像が見たい。」あるいは、「こんな写真はいいやだ。」とか意見がありましたら、ぜひ教えてください。

さて、今回も『言葉』にまつわる話を書きたいと思いますが、昨年、この紙上で『言葉』について書きます。」と公言した手前、ネタのストックをせねばと思い、気に入った「言葉」をあわててノートに収集整理し始めました。すると、当然かもしれないませんが、自分の言葉への『好き嫌い』がよく見えてきたのです。例えば、こんな言葉が書き写してあります。( )内は、その言葉を言った、あるいは書いた人の名前です。

●PKを外すことができるのは、PKを蹴る勇気を持った者だけだ。(ロベルト・パッジョ)

●この世に存在する数々の問題は、その問題が発生した時と同じ考え方で解決できない。(アインシュタイン)

●未来に前例などはない。迷ったら新しいほうを選ぼう！(山本寛齋)

●あなたの時間は限られている。だから他人の生を生きたりして無駄に過ごしてはいけない。ドグマ(教義、常識、既存の理論にとらわれるな。それは他人の考えた結果でできていることなのだ。他人の意見が雑音のようにあなたの内面の姿をかき消したりすることのないようにしなさい。そして最も重要なのは、自分の心と直感を信じる勇気を持ちなさい。それはどういうわけかあなたが本当になりたいものをすでによく知っているのだから。それ以外のことは全部二の次の意味しかない。(ステイブ・ジョブズ)

●「囚われる」ということの一側面には、みずから亡びるといったことが暗示されているように思われる。(宮城道雄)

●そこにあるものでなく、ないものをプレイするんだ。知っていることではなく、知らないことをやる。変化しなければいけない。それは呪いのようなものだ。(マイルス・デイビス)

その言葉を残した人の職業はまちまちですが、「変化」とか、「勇気」とか、「新しく」とか、とにかく目新しく変わっていくことに自分は価値をもち、興味があるのだなあとということがうかがわれます。ちなみに、アインシュタインやステイブ・ジョブズは、TVの情報番組などで取上げられることも多いので説明は不要だと思いますが、ロベルト・パッジョはイタリアのサッカー選手、山本寛齋さんはデザイナーです。あまりなじみのないのは、宮城道雄とマイルス・デイビスですが、二人とも故人で、宮城道雄は箏曲(琴の演奏です)、『春の海』(お正月に流れるあの曲です)の作曲家・箏曲家、マイルス・デイビスはアメリカのトランプ・ペット奏者です。この二人には、音楽家という共通点があり、二人とも「亡びる」や「呪い」というネガティブな語を利用して、**「変わらないこと」の恐ろしさを説いています。**

「少し違うなあ。」もつと工夫できないかな？」「このままでは行き詰るかも。」私はいつもそう考えてばかりいて、じたばたと落ち着かないという欠点をもっていますが、決まったことをやり続けるのがいいことだとは、どうしても思えません。古い物は好きですが、「歴史と伝統」を大げさに持ち上げることには距離を置くように心がけています。あまり向上心のない自分が、安易にそこに座りこんでしまおうと動けなくなるのでは？という恐れがあるからです。そして、いつのころからか、自信がなくなるとにかく動いてみる、迷ったら行動してみる、どちらか選ぶ時は新しいほうを、自分のことでも、周りのことでも、「できない」と決めつけないということが軸になりました。確かに、変わることは、この大小に関わらず勇気が必要です。変化のあとも、以前のほうが正しかったのではないかと思うこともあります。けれど、それだけが、ステイブ・ジョブズの言うように「あなたが本気になるためには、変化をおそっているのだとすれば、どこかにたどりつくためには、変化をおそれない気持ち」が最も大切と言っているのではないのでしょうか。

そのようなことを考えながら、近々東京で行われる同窓会東京支部で見てもらおうと、中芸高校の『創立三十周年記念誌』をめぐっていましたら、また良い言葉にめぐりあつたので最後に紹介しておきます。書いたのは、本校校歌の作詞をなさった宮田定繁先生(故人)です。(宮田先生は、本校創設当時の国語教師であられたこと、今回知りました。)

●動揺は進歩の姿である。「今日の我は昨日の我であつてはならない。」「一日過ぎれば一日進んだ我でなくてはならない。中芸高校での新しい一年を過ごす生徒の皆さんにも、自分や世界についてのこれまでの思い込みを囚われず、勇気をもってよい方向に変化していける一年にしてほしいと思つています。

## 平成二十七年入学式

四月七日(火)、昼間部二十三名、夜間部二名の新入生を迎え、入学式が行われました。

式では、入学生を代表して藤澤彩夏さんが「部活動や学校行事などに積極的に取り組み、自分自身の進路を決めるために、精一杯努力することを誓います。」と力強く宣誓を行い、高校生としての一歩を踏み出しました。



## 対面式・ホーム開き

入学式翌日の八日、二・三年生と新入生との対面式が行われ、生徒会長の有岡雅史くんが歓迎の言葉を述べ、これに一年生を代表して黒岩智美さんがお礼と決意の言葉で応えました。

続く部活動紹介では、文化部・体育部がそれぞれ作品やプレーを披露し、部員募集を呼びかけました。本年度からピアサポートホームが形を変え、一・二年次生の縦割り三クラスと、三年次生の計四クラス体制となりました。それぞれ最初のホームで自己紹介等を行い、全てのクラスが新メンバーで新年度をスタートさせました。

また後日、山田養護学校田野分校の皆さんとの対面式も行われ、校舎を共に使う同士で交流を深めていけたらと思います。



## 仲間作り

四月十三日(月)、一年生が「仲間作り(心の冒険教育)」を体験しました。これは初対面の人も自然に関わっていきけるように工夫された活動で、新しい環境に早く馴染み、意欲的に高校生活を送れるよう、毎年入学後間もない時期に実施しているものです。まだあまり話したことのない人も関わり、協力し合つて行なう活動の中で、少しずつ緊張が解けていくのを感じることができました。



## 進路ガイダンス

四月二十八日(火)、進路意識の高揚を図る演劇の鑑賞と、就職・進学に分かれてのガイダンスを行いました。多数の高校を訪問している講師の方のお話とお芝居は軽妙で、生徒たちは興味深く聞き入っていました。続く進路別ガイダンスでは、大学・短大・専門学校、学校案内や就職への心構え等を学び、それぞれの将来について考え、行動を起こすための、良い刺激をいただくことができました。

## 合同避難訓練

四月三十日(木)、田野小学校と合同の避難訓練を実施しました。高台にある本校は地域の避難場所になっており、共に単独での訓練は繰り返していましたが、今回は逃げてくる小学生を高校生が誘導し、緊急時への備えを新たにしました。



## 企業訪問

五月十三日(水)、二つのグループに分かれて左記の県内の企業を見学してきました。

▼一・二年生：「オルタステックロジー高知」  
「高知新聞社まほろばセンター」(共に南国市)

▼三年生：「黒潮観光開発株式会社」(芸西村)、  
「海辺の果樹園」(香南市)

「株式会社技研製作所」(高知市)

それぞれの事業所の特徴や業務内容を知るだけでなく、お話を伺い、現場で働く方の姿を通して、近い将来社会人となるために身につけておくべきことや心構えなど、進路を考える良い機会となりました。